

Eureka XII

六年制通信 No.17 令和6年9月2日(月)号

二学期スタート

八月の終わるころには、ちゃんとツクツクボウシが鳴くから不思議です。こんなに暑い夏でも忘れずに、しかも元気よく鳴いています。昔はあの独特の鳴き声は、夏も終わりですよ、これから涼しくなりますからねというサインだったのですが、最近はまだ夏休みの終わりを告げるだけになってしまいましたね。皆さん、暑い暑いこの夏休みを健康で元気に勉強できましたかな。クラブ活動は暑さ指数の制限もあって十分にできなかったかもしれませんが、そもそも外に出る気にならないほどの暑さでしたから、夏休みの運動については従来の考え方を変えていかなければならないでしょうね。ちなみに、八月九日は全国で桑名市が一番気温が高かったらしいのですが、私、その日桑名に出張していました。昼に仕事を終え松阪に向かったのですが、車の外気温が46℃と表示されていて「うそやん!」と声が出てしまいました。運転しながら南海トラフの地震が来たら、そして停電したら、クーラーや冷蔵庫が使えなくなったらどうなるのだろうと考えていました。私の世代は扇風機をつけたまま寝てはいけないと教えられたので、昨年までは扇風機のタイマーをかけて寝ていました。途中寝苦しくて起きてはタイマーをかけていたのですが、今年は初めてクーラーをつけたまま寝ました。ですから、停電になったら多くの人が熱中症にかかるのではないかと思います。心配ですね。阪神・淡路も東日本も今のような異常な暑さの中での震災ではなかったので、私たちは先例を持っていません。皆さんもそれぞれのご家庭で最悪の想定をしてできる限りの対策を立てておいてください。何事も「悲観的に準備し、楽観的に対処する」ことが肝心と言われているからです。

この夏はパリ五輪があって日本人選手も大活躍をしたわけですが、六年生の諸君はそれどころではなかったかもしれませんね。私もほとんど観ていなかったのですがフェンシングや馬術のメダルには驚きました。馬術の選手たちは「初老ジャパン」と呼ばれているようですが、本人たちも気に入っているようでよかったです。

オリンピックの季節になると、いつも小泉信三の言葉が思い出されます。「練習は不可能を可能にする」がそれです。どの文脈で言われたのかわからないのですが、できないこと、あるいはできなかったことができるようになるには練習しかないのは確かでしょうね。オリンピック選手は練習に練習を重ね四年に一度の舞台に立つわけですから、勝った喜びも負けた悔しさも想像を絶することでしょう。

武道の世界では練習ではなく「鍛錬」と言います。さらに、千日の稽古を「鍛」と言い、万日の稽古を「錬」と言う、こんなふうに言われます。文武不岐を考えると、

この練習なり鍛錬は当然ながら「文」にも当てはまります。千日万日の勉強は自分の能力を千日前万日前のものとは別物へと変えてくれます。わからなかったことが理解できるようになり、読めなかった文章の意味が手に取るようにわかってきます。不可能が可能になるわけですね。ところが、鍛錬を途中でやめてしまったらすぐゼロに戻ります。こういうところ、筋トレとそっくりです。そして、したりしなかったりしても成果は出ません。いつも言うように「学問の大禁忌は作輟なり」ですからね。とにかく自分を信じて続けることです。宣長の言うように、勉強の仕方をあれこれ考えるよりも「年月長く励み勤むるこそ肝要なれ」です。「継続は力なり」は真実です。

バドミントンの女子ダブルスの志田千陽さんがインタビューで大事にしている言葉を聞かれ「コツコツが勝つコツ」と答えていました。本人の作った言葉ではないようですが、語呂もいいし確かイチロー選手も同じことを言っていたように思います。この言葉に賛同するアスリートや研究者は多いと思います。コツコツと続けること以外勝つ道のないことを実感として知っているのでしょうね。コツコツ続けてどこまで行けるのか、それがその人の実力ということでしょう。「学問に王道はない」というのは直訳しすぎて誤解をされているのですが、この「王道」とは「近道」のことです。近道はなく、私たちはコツコツと一歩ずつ歩むほかないということですね。

今週のおすすめ

・森沢明夫 『おいしくて泣くとき』 (ハルキ文庫)

初めてこの著者の本を読みました。いい物語でした。映画化されるそうですよ。母親を病で亡くした心也。父親は妻の生前の望みでもある「こども飯」を無料で提供する「大衆食堂かざま」を経営している。貧しい暮らしをしている同級生も食べに来ている。クラスでいじめられている夕花も幼馴染であり食堂にくる一人。不良の石村もその一人。中学三年の夏休み前、心也と夕花はクラスの新聞係に任命されてしまう。二人はいいやいやながら、それでも二人だけで「ひま部」を結成し友情を育んでいく。そんなある日、心也の机に油性ペンで「偽善者」と、石村の机には「貧乏人」と落書きがされ、夕花は夕花で義父から暴力を受ける。この町から逃げたいという夕花を連れて心也は当てもなく汽車に乗る。一夜のエスケープですね。

中学生の二人とは別に、「こども飯」を提供するカフェの物語も同時に語られる。交通事故で車が突っ込みカフェの一部が壊され、マスターを守った桜の木も倒れる。そこへカフェの入口の所だけでも無償で修理させてほしいと見知らぬ若い女性から電話がかかってくる。二つの物語が収束するとき読む者の心が温くなる。

文中、父親のセリフに感動しました。「人の幸せってのは、学歴や収入で決まるんじゃないくて、むしろ『自分の意志で判断しながら生きているかどうか』に左右されるんだって」、本当にそう思います、私も。ちなみにこの物語、スマホのある現代では成り立たないかも。だから君たちにはちょっと想像できないところがあるでしょね。というか現代では起こりにくい奇跡の物語、とでも言いましょうか。

BGMは 森山直太朗 の 夏の終わり でした…。